

# 博士学位請求論文要旨

## 「ひきこもり(生きづらさ)」のセルフヘルプ・グループにおける相互行為秩序

### ——〈内在的困難性〉をめぐる現場エスノグラフィー——

中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程後期課程

利根川健(TONEGAWA Takeshi)

#### 要旨

本研究の目的は、外部社会への適応に困難性を感受し続けている「ひきこもり」の当事者同士の関係性に焦点を当て、困難性を媒介にした関係性がいかにして成り立っているのかを経験的に解明することである。その目的を実現するために本研究は、セルフヘルプ・グループ(SHG)と学術的に呼称される当事者集団(当事者同士の相互行為の空間)を調査してきた。本研究の核心は、「ひきこもり」の SHG における相互行為の形式的秩序(相互行為秩序)と、それを正当化していく意味秩序(フレーミング)との関係性に焦点を当て、両秩序がどのように相互に作用し合いながら「ひきこもり」の当事者同士の関係性を秩序化しているのかを明らかにすることにある。

本研究の学術的主題は、SHG において、いかにして相互行為秩序が達成・維持され、秩序のゆらぎが修復される／されないのかという問題であった。この主題設定は、従来の SHG 研究の知見(=SHG にオルタナティブな社会秩序の「可能性」を見出だそうとする立場)を建設的に継承すると同時に、その盲点となっていた問題(=当事者同士の関係性においてさえ「困難性」が生じていること)も合わせて主題化するために設定されたものである。本研究の最大の意義となっているのは、既存の SHG 研究の知見を外在的に批判するのではなく、それを内破するような新たな主題設定——〈内在的困難性〉の定式化——を行ったことにある。

経験的研究の結果、〈内在的困難性〉というものが「包摂を目的とした場で生じる排除」の問題経験にほかならず、行為者たちの包摂への志向性(=予期や期待)にもかかわらず現象してしまう構造的かつ非明示的な排除プロセスであることが明らかにされた。〈内在的困難性〉を経験的に捉えた本研究は、行為者たちの包摂への志向性を否定することなく、しかしそうした営みの限界を視野に入れながら SHG の調査研究を行っていく可能性を具体的に示した。本研究がもつ含意は、包摂のための実践を行っているほかの支援の現場に対しても——「排除の空間」として現実を解釈しないという意味で——広く応用可能なものであると考えられる。「包摂の担い手たちの苦悩・葛藤にアプローチしていく調査研究」(170 ページ)を主題化したことが、本研究の到達点である。

今後の課題としては、大きく二つある。第一に、本研究は「ひきこもりアノニマス HA」という「ひきこもり(生きづらさ)」の SHG を対象としたものであるため、HA 固有に現象する〈内在的困難性〉がどこまで SHG に経験的に一般化できるのかについて課題を残した。第二に、「相互行為秩序」論の内在的な検討や「包摂を目的とした場で生じる排除」の社会理論的な検討については課題を残した。

## **各章の要約**

### **【理論編】・・・第 1 章・第 2 章・第 3 章**

#### **第 1 章. セルフヘルプ・グループ研究の展開状況と検討課題**

第 1 章では、SHG を研究した研究者たちの認識論(モデルとアプローチ)を対象化し、その認識論的限界を明らかにし、本研究の主題を析出した。

本研究は、従来の SHG 研究を「オルタナティブな秩序化」研究と名付けたうえで、そうした先行研究を①「物語の共同体」モデル、②「対抗文化」モデル、③「困難性の抱え込み／解消」モデルの 3 つに整理し近年の動向も含めて内容を精査した。そこから、当事者自身の包摂への予期や期待を否定することなく、にもかかわらず現象してしまう秩序の問題や困難性を経験的に記述していく必要性を主張した。その結果、本研究の主題を〈内在的困難性〉として概念化し、〈内在的困難性〉を捉えるというメイン・クエスチョンとそれを分節化した 4 つのリサーチ・クエスチョンが導出された。

#### **第 2 章. 調査フィールドの概要**

第 2 章では、本研究が調査フィールドとしている「ひきこもりアノニマス HA」の概要について整理して論じたうえで、経験的なレベルの実情に合わせてリサーチ・クエスチョンの再定式化作業を行った。それによって【実証編】の構成が析出されることになった。

HA の概要を整理した結果、第一に、HA は「ひきこもりからの回復」を目標とする SHG でありながら、「生きづらさからの回復」を目標とする SHG として構成・運用されていることを明らかにした。第二に、「なにが『ひきこもり』なのか、なにが『ひきこもりからの回復』なのか、本人の自己定義に委ねるしかない」という文脈が HA では支配的なものとなっていることを明らかにした。そうした特徴を理論的に位置づけた結果、HA が〈私〉の自己定義に立脚することによって〈私たち〉の感覚を自ずから達成していこうとする特異な社会集団であること、そうした特徴ゆえに、秩序化プロセスのなかで生じる自然な排除プロセスが HA のなかには潜在している可能性を明らかにした。

また、HA の固有性と本研究のリサーチ・クエスチョンの適合性について検討し、そのうえで、リサーチ・クエスチョンを HA の文脈に基づいて再定式化した。その結果、「分かち合い」という物語行

為による秩序化のプロセスと、「12 ステップ」という回復実践による秩序化のプロセスが具体的な分析単位として析出された。そこから、メイン・クエスチョンを明らかにするための 4 つのリサーチ・クエスチョン——「分かち合い」の秩序化→困難性（第 4 章→第 5 章）／「12 ステップ」の秩序化→困難性（第 6 章→第 7 章）——が経験的なレベルで定式化された。

### 第 3 章. 調査プロセスの概要

第 3 章では、HA というフィールドに参加した調査者の立場性について、経験的研究の検証可能性という観点から整理して論じた。HA で実際に行われた調査プロセスをエスノグラフィックに記述したうえで、調査方法としては「現場エスノグラフィー」の手法が採用されており、調査関係としては「共同行為」としての社会調査の性質があることを確認した。さらに、〈私たち〉とは異なる〈私〉を感受し孤立した意味世界に留め置かれた HA メンバーの声を聴くという調査手法が、調査方法と調査関係の蝶番（ちょうつがい）のような役割を果たしていたことも明らかにした。

## 【実証編】・・・第 4 章・第 5 章・第 6 章・第 7 章

### 第 4 章. 「分かち合い」を通じた秩序化のプロセス

第 4 章では、HA の共同実践のひとつである「分かち合い」実践を通じて、いかにして秩序が達成・維持されているのかを経験的に明らかにした。分かち合いという相互行為（物語行為）を形式化している「言いつばなし・聞きつばなし」というルールの意味づけと位置づけを確認し、「傷つけられない場」という身体感覚のなかで自己物語を自由に展開できる場（＝相互行為秩序）として HA がフレーミングされていることを明らかにした。その結果、「言いつばなし・聞きつばなし」というルールに基づく相互行為秩序の効果（結果）として『自己物語』の書き換え[＝回復]の初期的条件」がもたらされていること、そうした秩序が HA メンバー同士の「語りと身体」を形式的に繋ぎ留め「共同性」の産出を潜在的に準備するようなプロセスが存在することを明らかにした。

しかし同時に、そうした相互行為秩序が必ずしも達成・維持され続けるわけではないという原理的な問題について確認し、次章以降の検討課題を整理した。

### 第 5 章. 「分かち合い」を通じた秩序化のプロセスの困難性

第 5 章では、HA の共同実践のひとつである「分かち合い」実践に適応した当事者たちが、その後いかなる困難性を感受していくようになるのかを経験的に明らかにした。HA が外部社会で生じる問題経験の抱え込みと意味づけ直し（＝回復）の機能を担う場として働いていることを明らかにすると同時に、HA の相互行為秩序への適応においてさえ困難性を抱える〈仲間〉が、適応したメンバーたちの「身体」を揺り動かし秩序を動揺させていることを明らかにした。そうした状況のなかで HA

メンバーたちは、〈仲間〉に対する包摂実践＝「不可能性への配慮」実践を模索しながらも、『『不可能性への配慮』の不可能性』が現象していることを明らかにした。そして、それが「包摂できない」というかたちで生じる排除のプロセスにはかならず、自分なりの「回復」を模索しない／できない行為者を自ずから排除する相互行為秩序の力学であることを示した。

## 第6章. 「12 ステップ」を通じた秩序化のプロセス

第6章では、HA の共同実践のひとつである「12 ステップ」実践を通じて、いかにして秩序が達成・維持されているのかを経験的に明らかにした。12 ステップという回復実践が〈心身のままならなさ〉を引き受ける生の形式であり、そうした「自己規律化」(ステップ 1～11) の実践を「他者の規律化」(ステップ 12) に接続していこうとする営みであることを明らかにした。

しかし、そうした生の形式が HA 全体に浸透しているわけではないという現実が同時に確認された。12 ステップの実践者たちは、「分かち合い」という相互行為を「12 ステップ」に接続していくための取り組みとしてフレーミングしていたが、HA メンバーの多くはそうしたフレーミングを共有していなかった。そうしたフレーミングの差異(規律の浸透度合いに応じた序列化)の問題に対して 12 ステップの実践者たちは、「多様な〈私〉の尊重」という(メタレベルの)フレームによって HA で現に達成されている相互行為秩序を正当化していこうとしていた。そうしたプロセスは、理論的には「解放の物語」の相対化を通じての「共同の物語」の創出——問題を解決するための物語行為を相対化し、問題を共有するための物語行為を絶対化する——メカニズムとして解釈された。いいかえれば、12 ステップ的な「解放の物語」に基づくフレーミングを相対化することで相互行為秩序が維持されていることを明らかにした。

しかし同時に、そうした「解放の物語」の相対化＝「共同の物語」の絶対化が引き起こす問題を最後に示唆し、次章における議論の内容を予告した。

## 第7章. 「12 ステップ」を通じた秩序化のプロセスの困難性

第7章では、HA の共同実践のひとつである「12 ステップ」実践に適応した当事者たちが、その後いかなる困難性を感じていくようになるのかを経験的に明らかにした。12 ステップの実践者たちは、自らの生の拠り所となっていた 12 ステップ的な生の形式が HA に浸透していかないという現実に対してアンビヴァレンスを感じていた。そうしたアンビヴァレンスは、自らが依拠しようとした 12 ステップ的な「解放の物語」と、HA メンバーたちの多くが依拠する問題の脱個人化＝共同化としての「共同の物語」との緊張関係として現象していると解釈された。それは具体的には、12 ステップ的な「解放の物語」を分かち合おうとする営みと、それが分かち合えない困難性を仕方のないものとして受け容れ、ほかの HA メンバーたちの包摂を(ひたむきに)行い続ける営みとして展開していた。

しかしその結果、12 ステップを実践する HA コアメンバーたちは「仲間の傷をただ受け止め受け容れなければならない」という状況へと追い込まれ、そこから身動きがとれずに閉塞していった（その結果、HA から離脱するというプロセスが起こっていた）。そうした閉塞を生み出すメカニズムは、問題の脱個人化＝共同化としての「共同の物語」への収斂と、それゆえに生じる「解放の物語」の個人化の状況として解釈された。つまり、相互行為秩序という「形式」を 12 ステップ的にフレーミングしようとする——回復の「内容」を集会的なものとして構築していこうとする——行為者たちを、自ずから排除するかたちで秩序が達成されていることを明らかにした。

## 【結論】・・・終章

### 終章. HA における秩序化のプロセスとダイナミズム

終章では、本研究のメイン・クエスチョンである「HA において、いかにして／いかなる〈内在的困難性〉が現象しているのか？」に対する回答を行った。メイン・クエスチョンを分節化した【実証編】における 4 つのリサーチ・クエスチョン（各章の知見）それぞれに回答し、それを接合し吟味した。その結果、次のような回答が得られた。「HA には『〈私〉の自己定義に立脚することによって〈私たち〉の感覚を自ずから達成していこうとする営み』に収束していくような相互行為の秩序化のメカニズムが存在している。そうした収束メカニズムは、相互行為の『内容』となる回復を、自己定義によって構築できない行為者／集会的なものとして構築していこうとする行為者の非明示的な排除によって達成されている。そして、その収束のメカニズムから零れ落ちた者たちが経験する「身体」的な問題経験こそが〈内在的困難性〉にほかならない。そうした〈困難性〉は、包摂を目的とした場において生じる構造的かつ非明示的な排除の力学として現象している。そのような排除の力学の結果として、HA における相互行為秩序は『形式』として続いていくのである」——これが、本研究が出した結論となる。

SHG における〈内在的困難性〉を経験的に捉えた本研究は、行為者たちの包摂への志向性を否定することなく、しかしそうした営みの限界を視野に入れながら SHG に対する調査研究を行っていく可能性を具体的に示した。本研究がもつ含意は、包摂のための実践を行っているほかの支援の現場に対しても——「排除の空間」として現実を解釈しないという意味で——広く応用可能なものであると考えられる。「包摂の担い手たちの苦悩・葛藤にアプローチしていく調査研究」を主題化したことが本研究の到達点であることが確認され、「包摂を目的とした場で生じる排除」という現実を問題化し本研究は終わりを告げた。